受賞のことば

ヒュームのように書きたいと願った

財務総合政策研究所客員研究員
在米国日本国大使館公使
廣光 俊昭

受賞に感謝を申し上げる。著名大学などに専属しない私の著作が、学術的評価の高い本賞に値すると認めて頂いたことに、審査の先生方の眼力に畏敬の念を禁じ得ない。

本書は、いまだ生まれざる者を含む、異なる世代の間に成り立つべき道徳上の関係について考察した、基礎的な研究書である。気候変動や公的債務問題にみられる通り、世代間の利害をいかに調整するかという問題を、我々は避けることができない。本書は、世代間に成り立つべき道徳関係を提示することから、その関係を現実のものにするための方法論を提案することまでを課題とする。

本書の取るアプローチは三つある。第一は哲学と経済学という二つの学問の方法を照合することである。哲学の関心は、その理論的枠組みを参照しつつ、我々の負う道徳上の義務や価値についての新たな解釈を提示することにある。経済学はある義務や価値を所与としつつ、それに基づき行動する人々の相互作用の帰結を明らかにする。第二は、経済実験を導入することで、議論の一般性を保ちつつ、理論上の可能性に止まらない、現実の世代間で起こり得ることにまで議論の射程を伸ばすことである。第三は各世代の選好を固定的なものとはしないことである。本書は、一定の脈絡のもとで選好が内生的に決まる状況へと考察を及ぼす。

問題の描写に止まらず、本書は新しい考えを積極的に提示している。まず、人類が存続することの価値に着目した哲学者サミュエル・シェフラーの議論に基づき、世代間関係を互恵関係としてみることを提案する。また、財政政策に関する実験から、シルバー民主主義論が強調され過ぎていると述べ、将来世代の利害を意思決定に取り込む方法を検証する。さらに、時間割引の概念を精査し、現在と未来を等しく処遇することが可能で支持に値することを論証する。

本書は 21 世紀に生きる私が、18 世紀の知の巨人、デイヴィッド・ヒュームのように書きたいと願ったことから生まれた。彼は哲学と経済学、政治学などを一人で遂行し、因果論、脳神経科学、ゲーム理論など、いまなお我々の霊感の源泉であり続けている。私も彼に倣い基礎的研究を重ねていきたい。その営みから学界と（現在も自分の属する）行政にも役に立つことができるのならば、ありがたい。

ひろみつ　としあき
1992年東京大卒、大蔵省（現財務省）入省。主計局主計官などを経て、2021年から在米国日本国大使館公使。同年一橋大から博士号（経済学）取得。69年生まれ。